

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22330228

研究課題名(和文)ヨーロッパの英語教育と挿絵

研究課題名(英文)The Use of Illustrations in Teaching English in Europe

研究代表者

寺田 寅彦(TERADA, Torahiko)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：30554456

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はヨーロッパで出版された英語教科書のイラストや写真の役割を検討したものである。外国語習得にイラストが有益であるのは、なによりも見て美しく、また文化的背景を学習者に提示するからである。今日出版されている英語教科書のほとんどがカラーイラストの入ったものである所以である。しかしながら、書かれていることと一致しないイラストや、情報過多ともいえるイラストが入っていることがある。それらは歴史的・政治的背景により、テキストの内容ではなく、ナチス・ドイツのスローガンのような政治的メッセージの内容を示しているのである。単なる語学学習が政治的道具に使われることを、本研究は明らかにしている。

研究成果の概要(英文)：Our research examines the function of illustrations and pictures in the English textbooks published in Europe. In general, visual aids are useful to learn foreign languages. They are, first and foremost, beautiful to look at, and show the cultural background to the learners who don't know it. That's why current English textbooks are full of images, most often in color. Despite this remark, we sometimes notice that several illustrations don't match the description. We observe also some "talkative" illustrations which bring much more information than expected. Our analysis shows that they often are under the influence of political and historical context. Those visuals - originally made just for their appealing beauty - don't illustrate texts but in fact political message like a Nazis slogan under the Third Reich. Reconsidering the illustrative function of images in English textbooks lets us know that learning foreign languages is fully aware of political scheming.

研究分野：人文学

キーワード：挿絵 英語教育 ヨーロッパ フランス ドイツ イタリア スペイン ロシア

1. 研究開始当初の背景

本研究はテキストとイメージ学という新しい分野の知見を基盤として行われるものである。IAWIS (International Association of Word and Image Studies)の活動のように、1980年代後半からテキストとイメージの関係に特化した研究が進み、教育における挿絵研究はとりわけ充実した成果を挙げた。その例として、本分野でもっともよく知られたフランス人研究者の一人であるセゴレーヌ・ル・メン (Segolène Le Men) の2001年の業績である『十八世紀から十九世紀のイギリスとフランスの文字学習教材』(*Abécédaires anglais et français XVIIIe-XIXe siècles*)を挙げることができる。具体的な教材例と理論的な教材分析が行われ、教育における体系的なテキストとイメージ研究がなされた。

語学教育においても挿絵をはじめとする視覚教材は重要な役割を果たしており、とりわけ現在では挿絵のない語学教材は考えられないほど挿絵の存在が一般化している。それと同時に、英語教育をはじめとする語学研究においては先進的な視覚教材が重視されるその一方で、教科書における挿絵の役割については必ずしも深い議論がなされてこなかった。それはあくまでより有効な教授法の開発のみに現在の語学教育の視点が向いているためであり、今まで作成された教科書をはじめとする教材における挿絵の役割について、あらためて焦点を当ててその役割を分析するということがなされなかったためである。この分析には歴史的背景からの検討が欠かせず、また必ずしも教育学と直接結びつかない研究方法が障壁になっていたということもある。ましてやヨーロッパの英語教育における挿絵の役割に焦点を当てる研究は、現在にいたるまで日本においてはほぼ行われることがなかった。

2. 研究の目的

英語教育はヨーロッパの多くの国で多かれ少なかれ行われてきた。英語という外国語を学習するためには、教科書やドリル、掛図などの教材にイラストを用いることが多く、教科書への挿絵の導入が早かったフランスでは19世紀から挿絵の使用が一般化していた。しかし、興味深いことにテキストとの比較から、このイラストが単なるテキストの視覚化を超越した内容となっていることがある。あるいは、同じテキストの内容を視覚化しているにもかかわらず、時代が違えば挿絵も異なっていることもある。このような類の「ずれ」は、英語も含めた外国語教育の背景にある政治的・社会的意図が関係していることがある。そこで、このような挿絵の内容・役割・表現様式を分析することで、テキストの分析だけでは理解されないヨーロッパ諸国の外国語教育観を明らかにすることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

国家による教育体制が整っている国では、本当に使用されるかどうかの問題はあれども、ほぼ必ず教科書が作られる。ただ、教科書は多くの場合は消耗品であり、また改訂がされると今まで使われていた教科書は処分されるために、過去の教科書を入手して検討することは必ずしも容易なことではない。とりわけ英語は国によっては主要科目ではなかったために、教科書自体をまとまった形で閲覧できる場所は決して多くはない。

本研究では、主に国立図書館や公立図書館、さらに可能な場合には教育博物館のような機関に所蔵されている英語教科書を閲覧し、そのテキストの内容と比較しながら挿絵の内容・役割・表現様式に検討を加えることを研究の方法としている。

研究対象国は、イギリスとの国交関係が歴史的に深いフランスとスペイン、とりわけ第二次世界大戦でイギリス・アメリカと敵対関係にあったドイツとイタリア、さらに冷戦時にイギリス・アメリカと敵対関係にあったロシアの5か国に絞って調査を行った。地道に該当国の教科書所蔵機関で調査を行い、可能な限り視覚媒体(コピー、写真、等々)でテキストと挿絵を入手した。教育理論や教育手法の傍証としてではなく、挿絵が教育政策の観点からどのように使われているか、テキストと挿絵はどのように食い違いを見せるか、年代によって教科書の挿絵はどのような違いを見せるかなどの領域横断的ないしは年代横断的な比較研究を手法として用いた。

4. 研究成果

本研究の研究期間は平成22年度から平成26年度までと長期にわたっており、またヨーロッパの5か国(ドイツ、フランス、イタリア、スペイン、ロシア)を基本的には1か国1年という配分で調査を予定したが、現実には複数年次にわたってドイツやフランスへの調査が続行され、並行してイタリア・スペイン・ロシアの各国の調査が遂行される研究手順をとった。そこで本成果報告書では、研究成果を年次ではなくそれぞれの項目に分けてまとめるものとする。

(1) 日本の英語教科書の挿絵の役割についてのまとめ

本研究では、ヨーロッパにおける英語教科書の用いられ方の検討が主眼となっているが、ヨーロッパにおける研究成果がまとまらない初年度には、現地調査を進める一方で、日本で手に入りやすい日本の英語教科書を検討することで分析手法の確立を目指した。日本の英語教科書の実証的研究については江利川春雄の研究が大きな成果を挙げており、その中には挿絵についての重要な分析もある(『日本人は英語をどう学んできたか 英語教育の社会文化史』)。この江利川の研究を活かしつつ、イメージとテキスト研究の観

点からの整理と意味づけを本研究では行うこととした。明治時代の開国とともに日本の英語教育は本格的に始まったが、その英語教科書の内容は、とりわけ中学生の初歩の段階においては、まだ簡易な文法しか学習していないことから基本表現や挨拶などのほぼ同様の文が用いられている。しかしながら、その同じようなテキストに用いられる挿絵は文字通り百花繚乱であり、外国の挿絵をそのまま用いたものから、外国の生活様式を取り入れたものや、あるいはまったく日本の生活をしながら言葉だけが英語になっているものまで、その表現は多種多様であった。しかし、そこから読み取れる一つの方向性はいわゆる欧化熱であり、文化の「先進国」であった欧米に追いつこうとする意欲が、変哲のないテキストに付された挿絵にとくに顕著に表れたと言える。一方で戦時中の英語教科書は、ほぼかわらず同じテキストであっても、挿絵は文字通りの国民兵養成を意識した挿絵になっており、また男子学生のはるか後方に女子学生が歩くような挿絵を付すなど、戦争下の教育ムードを反映したものとなっている。その一方で戦後の英語教科書は、これもまた同じテキストであっても服装や人間関係などの自由を前面に出したものとなり、男女の平等や米国の生活の豊かさを強調するものとなっていた。この米国の生活の豊かさは戦後最大の人気を博した「ジャック&ベティ」シリーズでも挿絵で表現され、大邸宅や電化製品などの米国における生活レベルの高さを強調することでアメリカン・ドリームを示すものとなっていた(下記「雑誌論文」5)。

このようなさまざまな政策を背景とする語学教科書の挿絵のありかたは、英語教科書とは異なるものの、植民地下の台湾における日本語教育でも同じであった。同化政策の位置づけで五期にわたって出版された台湾の日本語教科書では、ほぼ同じテキストでありながらもその挿絵の変化から、同化政策から戦争教育への政策変遷を如実にたどることができる。台湾的な服装から日本的な服装への変化、辮髪から日本式丸刈りへの変化だけでなく、挿絵に描かれた児童の習字や絵図の内容(「たいわん」の「た」の字や、富士山の絵)からも、語学教育の中にある同化政策の一端を見出すことができるのである(下記「雑誌論文」4)。

(2) ナチス・ドイツの英語教科書

このような「同じテキストに異なる挿絵」という図式は、ヨーロッパの教科書には当てはまらないこともある。一番大きな理由は早い段階からテキストのレベルが高くなり、その内容がバラエティに富んだものであるからだが、それでもなお挿絵の変遷の分析が語学教育における政治的背景を明らかにすることができる。その例はドイツのナチス政権下で作成された英語教科書で如実に見てとることができる。ナチスの教育への介入はとみ

に論じられることが多いが、今までは英語については語学教育であって政治的な介入についてあまり強調されてこなかった。ところで、1933年以降のドイツの英語教科書を検討すると理由もなくボーイスカウトの写真が使われることに気付く。1920年代までには多くは見られない現象であり、ナチス政権下においてはこのボーイスカウトを扱ったテキストも明らかに増えてくる。1934年からは、ヒトラー・ユーゲント活動の妨げになる理由からボーイスカウト運動そのものが禁止されていたことも考え合わせると奇妙な現象である。

このボーイスカウト活動の英語教科書における特権的地位は、同様の屋外活動であるワンダーフォーゲル運動はナチス政権下の英語教科書からは姿を消すことから確認される。それではなぜボーイスカウト運動が特別な扱いを受けているかというのは、挿絵では持ち物検査や敬礼などが頻出することから理解される。すなわち自由な価値観を標榜したワンダーフォーゲル運動とは異なり、規律、秩序、忠誠というドイツ・ナチスにとって若者を教育するのに便利なプロパガンダがボーイスカウト運動では示すことができただからである。そして、そのメッセージはテキストもさることながら、とりわけ挿絵において文字通り目に見える形で教科書を使う学生たちに届けられたのだった。このような挿絵の中にはテキストは「きらきら星」の歌の英語歌詞であるにもかかわらず、挿絵では南ローデシアのボーイスカウトが気焔を上げる類のものもあり、南ローデシアがイギリスの帝国主義と植民地主義の象徴的存在であったことも鑑みると、ナチス政権下の英語教科書が、戦争プロパガンダのみならず帝国主義と植民地主義を称揚する政治的戦略のひとつの道具だったことが確認されるのである。(下記「雑誌論文3」)

(3) ヴィシー政権下フランスの英語教科書

ドイツのナチス政権下での英語教科書に登場するボーイスカウトの挿絵が、ナチスのプロパガンダを広める役割を果たしていることは、ドイツにおいてのみみられる特異な事象であることが、やはりナチス政権に大きく加担したフランスのヴィシー政権下における英語教科書を検討することからも分かる。1940年に独仏休戦協定が結ばれてからナチス政権の影響下にあったフランスにおいては、ボーイスカウトの表象はほとんど表れない。まれに確認されるボーイスカウトの挿絵では、テキストでも挿絵でも楽しい戸外の活動という側面が強調されており、規律や忠誠、あるいは植民地主義や帝国主義という価値観はまったく見られない。これはひとつにはフランスにおいてスカウト運動がカトリックとプロテスタントとユダヤの宗教問題と密接に絡んで複雑な発展を遂げたことと強く関係する。とりわけ教育の現場は、宗教と公教育の分離が実施されたフェリー法以

来、無宗教（ライシテ）が掲げられており、教育とボーイスカウト運動が結びつくこと自体に困難があった。そのために、ボーイスカウト運動が学校の教材である教科書にとりあげられることは難しかったのである。

ところでこの数少ないスカウト運動をとりあげる場合でも、フランスの英語教科書がこのスカウト色をさらに弱めていくことがテキストと挿絵の分析から理解されることも指摘しておくべきだろう。ヴィシー政権下においてはスカウト運動が軍隊式に構想されていることから、むしろヴィシー政権がスカウト運動を巻き込もうとする動きが顕著化した。一方で教科書を作成する側の教員たちはまったく逆に社会主義的で平和主義的な傾向をもっていたのである。このような教員たちの中でもとりわけ語学教員は、フランスではドイツ語と英語の二つが主に教授される外国語であったこともあり、その多くが動員されていた。公教育現用言語教員委員会（Association des professeurs de Langues vivantes de l'Enseignement public）が発行する機関誌『近代語』誌（*Les Langues modernes*）の精査から、動員されたり、あるいは動員の危険にさらされながらも語学教員がさまざまな形で抵抗運動に身を投じたことが理解されるのである。このドイツ語と英語の両言語の教員が連携して抵抗運動を進めていたということも、この機関誌からは理解される。もともと 1871 年の普仏戦争の敗北の衝撃から、国防としての語学教育が推進されたフランスではドイツ語と英語の両方の教員が、協力して同じ挿絵を使った両言語の教科書を作成するなど、歴史的にゆるやかな連携体制をもっていた。この連携がドイツの抵抗運動で力を発揮したのであり、そのような状況下では、わずかにドイツに迎合する内容が英語教科書に認められることはあっても、大きくドイツ寄りの内容になることはなかったのである。（下記「雑誌論文」1）

（4）ムッソリーニ政権下での英語教科書

ドイツ・ナチス政権と同じく、イタリアではムッソリーニによるファシズム体制がしかれたが、イタリアでは独自の語学教育面での特徴があるために、英語教科書においてもドイツやフランスとは異なる側面が確認された。もともと地方語の使用が根強く、イタリア語の教育自体が外国語教育のような様相を呈したイタリアにおいては、イタリア語教育がすでに語学教育として重視された。第一次ムッソリーニ政権の国民教育省大臣はファシズム理論家として名高いジョヴァンニ・ジェンティーレ（Giovanni Gentile）であったが、この時に教育改革を担当したのは必ずしもファシズムに与しない理想的な教育を目指したジョゼッペ・ロンバルド＝ラディーチェ（Giuseppe Lombardo-Radice）であった。このロンバルド＝ラディーチェが左遷されるまでのあいだ、初等教育におけるイタリア語教育の教科書は内容と見た目の美し

さが重視されて、カラーの表紙や挿絵が充実したものとなる。しかし、ロンバルド＝ラディーチェが左遷されて、教育におけるファシズム化が進んだ 1925 年以降は、質素な教科書が使用されて、挿絵も極端に少なくなる傾向が生じた。イタリア語教育から翻って英語教育においては、ほとんど挿絵が入らずラテン語の教科書のように文法と語彙の集大成としての英語教科書がひろく定型化した。このような中で『イタリア人独学者のための英語』シリーズ（*L'Inglese per l'Italiano autodidatta*）は、戦争用語が語彙として入り、また挿絵もそれに付されて、中には空爆の内容を描いた章がある版もあり、当時のイタリアの英語教科書の中では独自の位置を占める。ただ、この教科書シリーズを詳細に検討すると、ドイツ語やフランス語などの他言語との関係でこの英語教科書が作られていることがわかり、軍人の語学教育の中で使われることも前提とされたことが示唆される。その一方で、1970 年代以降はヒッピー文化などのイギリスの社会的状況をとくに取り上げる英語教科書が目立ち、語学と文化の結びつきがテキストにおいても挿絵においても顕著化するようになる。（下記「雑誌論文」1）

（5）スペインとロシアにおける英語教科書

イタリアのように、英語教育の特殊性が挿絵研究により明らかになることは、スペインやロシアにおいても同様である。スペインではフランコ政権下の教科書を、ロシアではソ連時代あるいはペレストロイカの時代の教科書を中心に調査を行ったが、両国では英語教育が必ずしも重視されておらず、検討される教科書自体が量的に少ない現実があることをまず指摘しなくてはならない。

同時にスペインにおいてはカトリックが、ロシアにおいては当然共産主義が、テキストにおいてもまた挿絵においても重要な要素になっていることが指摘される。祈りを、あるいは共産主義の教義を、英語で唱えらるとうなるかが英語教科書でとりあげられる。現代において流通している英語教科書ではこのようなことは認められず、語学教育である英語の学習において、社会体制・政治体制が大きな影響を与えることがここからも確認される。（論文未発表）

（6）イラストの技術

フランスとドイツにおいて、挿絵がひろく用いられたその背景には、語学教育の充実のみならず、19 世紀からイラストの技術が大きな進歩を遂げていて、廉価で挿絵利用が可能だったことが挙げられる。これはフランスの場合には、ジロターージュとよばれる技術がとくに 19 世紀後半にひろく用いられたことと関係する。父フィルマン・ジロ（Firmin Gillot）のパニコノグラフィ（paniconographie）とこれを写真技術に転用した子シャルル・ジロ（Charles Gillot）の親子による印刷技術革新は、とりわけシャ

ルルの時代に写真製版技術が確立することによって飛躍的に進んだ。この技術革新により挿絵のリユースや拡大・縮小での部分使用などが容易になり、出版物における過剰な挿絵使用という状況を生んだ(下記「雑誌論文」2)。フランスやドイツにおける英語教科書は、このような技術面での進歩を享受していたと考えられるのである。

以上、単なる語学教育と考えられがちな英語の教科書においても、歴史的・社会的背景の反映がとりわけ挿絵の詳細な分析により確認されるものの、その挿絵と教科書のつながりの深さは国によって違うことも理解される。それには技術的な側面や、英語の必要度が関係しているのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

寺田寅彦「ナチス政権下の政治的手段としての英語教科書(後編)」(東京大学総合文化研究科超域文化科学専攻『超域文化科学紀要』査読有、第19号、2014年、27頁-44頁)

寺田寅彦「小説の挿絵 変換と変異としてのイラストレーション」(『西洋近代の都市と芸術 パリ 19世紀の首都』査読無、竹林舎、2014年、423頁-438頁)

寺田寅彦「ナチス政権下の政治的手段としての英語教科書(前編)」(東京大学総合文化研究科超域文化科学専攻『超域文化科学紀要』査読有、第18号、2013年、69頁-84頁)

Torahiko TERADA, "Évolution des illustrations des manuels scolaires utilisés à Taïwan au temps de la colonisation japonaise", *L'école et la nation*, sous la direction de Benoît Falaize, Charles Heimberg, Olivier Loubes, (査読有), ENS éditions, Lyon (France), 2013, pp. 353-368.

寺田寅彦「イラストレーションのパワー」(『ガクモンの宇宙』査読無、東京大学出版会、2012年、2頁-17頁)

〔学会発表〕(計 4件)

寺田寅彦「仏・独・伊の英語教科書イラスト分析」(「グローバル社会の教育課題」研究会セミナー「教科書分析を考える」、2013年4月19日、於東京大学教育学部教育学研究科(東京都文京区)第1会議室)

寺田寅彦「教科書のイラストから見たドイツにおける英語教育」(UTCP セミナー「イメージと教育」、2011年12月16日、於東京大学総合文化研究科(東京都目黒区)21KOMCEE 館201教室)

寺田寅彦「教科書の挿絵が見せてくれるもの 植民地時代の台湾の教科書の場合」(東京大学総合文化研究科/UTCP 主催共同セミナー「他国支配と教科書の挿絵」、2011

年3月11日、於東京大学総合文化研究科(東京都目黒区)18号館、震災のために情報交換会に変更)

Torahiko TERADA, "Evolution des illustrations des manuels scolaires utilisés à Taïwan au temps de la colonisation japonaise", Colloque international "L'école, la nation, les colonisations et les empires" à l'Université Paris IV - la Sorbonne, Paris, (France), le 3 décembre 2010.

〔図書〕(計 件)

なし

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

なし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

なし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<http://textes-images-terada.org/> (整備中)

6. 研究組織

(1)研究代表者

寺田寅彦 (TERADA, Torahiko)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号: 30554456

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号: